

---

# 詩

Sorairo 光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

詩

### 【Nコード】

N6892Z

### 【作者名】

Sorairo 光

### 【あらすじ】

時々、感情を音へ変換したもの。言葉の繋つなぎ。言葉はむずかしいので、読んでいただいた読者様にそれぞれの考えが持てるようなものを書けたらいいなーと思っております。それぞれに関連性はあまりありません。

## 底へ沈む。

罪を歌う僕がいた。罪を歌いながら、自分を苦しめていた。君は、ちよつとだけ笑った。

それは、待機中に散布して、やがて、淡く溶けて鈍色に輝いた。

僕は僕を知っていた。僕は僕を知っていた。

鳥に惹かれていた。僕は、音にならない泡をはくだけだった。

僕は僕を知っていた。僕は僕を知っていた。

想いは、ぎゅうぎゅうに締め付けられて、一つばかり眺めてしまつて、僕は溺れていく。

いらぬ、ただ弱い僕は、欲しい願う。鳥も、あたたかな日差しも。

僕がぎゅうぎゅうになるのは仕方なくて、僕がどんどん沈んでいくのも仕方なくて、僕は僕を戒めるために冷たい刃を突きつけた。

僕は僕を知っていたのに、僕は僕を知らないふりをした。

泡を吐き続けて、柔らかな日差しと美しい翼に魅入りながら、僕は沈んでいく。

罪を歌う僕がいた。罪を歌いながら、僕は刃を僕に向ける。

弱くて、弱くて、矛盾を求めて、弱虫な僕は、どんどん沈んでいく。魚のように青い宙うへを泳げたならば、風のように碧い大地を駆け巡ることができたならば。

どれも叶わぬ夢を見て、眠るように、引き上げられる時を待っている。

永遠に目覚めぬかもしれない時をすごしながら、白んでいく視界を眺めていた。

## こがれて

憧れていた。でもきつと君たちは知らないだろう。

僕は、通り過ぎて、消えるだけの存在だから。

僕は、青い青い光が羨ましかった。僕は、青い、青いキラキラが羨ましかった。

僕は、白いキラキラも、白いふわふわも、ひとつひとつの粒も羨ましかった。

駆け巡るたびに感じる緑のわさわさも、茶色のゴツゴツも、灰色の何かも、トゲトゲした銀色も、羨ましかった。

僕が向かう先は、誰も知らない。僕がどこで生まれて、どこから来て、どこで消えるのか、そんなもの、僕にもわからない。

息するものの中、いろんな中で、旅を続けた。

ずっと続けられはしないことは、分かっていた。それでも、走り続けた。

この両手をめいいっぱい広げて、この両足をめいいっぱい蹴り上げて、走って走って、いろんなもののそばを通り過ぎて、いろんなものの中をかけた。

そんななかで、不思議なものに出会った。

黒くてさらさらで、オレンジに近くて、そうじゃない、あたたかな何か。

僕は消える寸前だったと思う。でも、はつきりと覚えている。

僕は、ありつたけの力をこめてかけよった。

僕の手は、それに届いた。暖かい。

でも、当然、触れることなんかできなかった。そのまま僕は通り過ぎて、さらさらと流れる黒い何かを横目で捉えた。

僕が君にこがれたことは、きつと君は一生知らないのだろう。

僕が君にこがれたことは、知ることなど、ありえないのだろう。

それでも僕は、消えるわずかばかりの時間に、君に会えたことをよ

かつたと、君のそばで消え去ろう。  
この意識はきつと消えて、永遠に失われるかもしれないとしても。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6892z/>

---

詩

2011年12月23日02時45分発行